青春18きっぷを片手に

鎌田 澄江

（岩手県下閉伊郡岩泉町、五十五歳の方。震災復興ボランティア団体の代表を務めているそうです。「よみがえれ、三陸！」という熱いメッセージとともに）

今運命の日から五ヶ月
青春18きっぷを片手に答えを探す旅に出た
地震と津波でたくさんの友人と知人を失った
仕事仲間たちの職場と家が流された

瓦礫、瓦礫というけれど
そこには平凡でも心豊かな暮らしが あった
たわいもない喧嘩もしたけど家族がいた
団らんがあった
瓦礫は思い出そのものだった

ローカル線がいっそう悲しさや悔しさを増した
普通に暮らす人々の普通のいとなみと車窓から見える町並み
なぜ、なぜ、なぜの答えを探す旅なのに

旅先で、たくさんの出会いがあった
涙をためて話を聞いてくれる人
何もできない無力さを申し訳なさそうに語る人
「ずっと応援し続けるから疲れないように頑張れよ」とはげましてくれる人

「忘れるということが一番優しくないこと」という言葉にも出会った
あっ、そういえば
壊滅的な被害を受けたところにボランティアで入ったとき
「忘れねぇでけろ」と言われた
一人ひとりの力は微力だけれど
決して無力じゃない
忘れないことが大事なものを失った人の心に寄り添うことになるとわかった旅だった
太陽の光は皆に公平にふりそそぐこともわかった旅だった

五日間の青春18きっぷを使いきる頃
普通に暮らす人々をうらやむ心も
誰にぶつけようもない怒りも薄らいだ
ローカル線でゆっくり旅をして、本当に良かった

今は希望を持つことに大きなエネルギーを必要とするけれど
「私たちは負けません」と声を大にして言える日が
きっと来ると思うから
「私たちは決して決して負けません」と声を大にして言える日が

愛と未来

山城 南（沖縄県 一五歳）

辛いとき支えてくれた
涙を流しているとき隣にいてくれた
それは誰だろう

家族・友達・恋人・先生
もしかしたらたまたまそこにいた人かもしれない

愛がある
私たちには
たくさんの愛がある

愛がある所には
必ず道ができ、光が溢れる
そしてまた、愛が溢れる

そしてこの出来事を
明るい未来への
第一歩にできるはずだから

未来を望む

霞貫木 祥（山形県 二九歳）

澱は病のように降り積もる
過去を向いて生きることも 押しつぶされることも
痛みを無かったことにする忘却も

ぽつん と
諦めている人の目の奥にある黒い空洞は
のぞきこむと果てがわからず 恐ろしくすらあります

私たちの身近にある
暗がりへと転がりゆく道

ああ けれど
人は未来を生きたいと泣くのです
大声をあげて
時に言葉を発さずとも

あがこうとする人間が持つ輝きが
涙が ふるえるほどに心を打つのです

絶望に立ちつくす人へ 未来があなたを呼ぶ声が
聞こえますか
さしのべられる見えない手を感じることができますか

生きましょう
笑いましょう
泣きましょう

「ここで止まるんじゃない」
遥か先のあなたが
あなたへと叫び続けています

いつだって本当は
人は心の深い芯に
キラキラと消えない1等星を抱えて生きているのです

一歩 もう一歩 そして前へ
さあ ゆきましょう
さらに一歩

ふるさと

藤原 ねこ（福島県福島市・三八歳）

澱ねえ
私が赤ちゃんをうんで
お母さんがばあちゃんになって
じいちゃんがひいじいちゃんになって
そしたらね、

ひいじいちゃんの家で
ひいじいちゃんの作った
野菜を食べよう

田植えも手伝うよ
私は大人になってるから
いっぱい手伝えるよ

私の子供にじまんするの
山がきれいでしょう
川もきれいでしょう
日差しがキラキラしてるでしょう
野菜も米も、とってもおいしいでしょう

これが、
私たちのふるさとだよ

いつかそういう日がくるって
私は信じてるよ

※私の実家は川俣町です。計画的避難区域ではありませんが、放射能に汚染されました。父は今年も田植えをし、畑に野菜を作りました。米は食べられるかどうかわかりません。せっかく作った野菜もかわいい孫に食べさせていいものか、父も私達大人も、悩んでいます。この詩は、娘たちの言葉をもとにして書きました。悩む大人の側で、子供たちは未来を見つめていました。

僕はこの母の子どもである

渋谷 佳樹（登米市立南方中学校特別支援学級三年）

「うざったい」「うるさい」「干渉するな」母と顔を合

わせると、最近はこんな言葉が口に出る。保育所に通っていた頃は、家に帰ってくると、まずは「お母さん、どこ」と、ただいまより先に叫んでいた。でも、そんな私も中学三年生。私は病気で運動制限もあり、特別支援学級の病弱学級で一人で学習している。

ある時、私が「何で僕だけこんな病気になったんだろうね」とつぶやくように母にたずねる。母は「ごめんね」とただ下を向いていた。

この間の大地震の折、「大丈夫、けがしなかった」と僕にかけよった母の目には大粒の涙があふれていた。自分一人でここまで大きくなってきた訳ではない。周りのみんなにいっぱい心配をかけ、そして、支えられて生きてきた。これからもそうだろう。母には特に一生そうであろう。そして、私を産んでくれて育ててくれたのは、この母一人であるから。

つなげたい

あしび白帆（福島県石川郡　五二歳）

地球が生まれて何億年
生命が宿って何億年
ずっとつながってきました
次へ渡されてきました
花は種へ
親は子へ
命を送ってきました
遠い昔から
はるかな未来へと

進化とは賢くなって
エネルギーを作ることではなく
強くなって
戦うことでもありません
進化とは命を進めること
命を生み、育み
地球に生きることです

ここで生きたいのに
危険だから避難しろといわれ

私達はまちがった進化をしたのでしょうか
正しい進化にもどせますか
命をつなげますか

地球がダンスをした日

杉山磨哉（宮城県仙台市宮城野区　二八歳）

震恐怖の揺れに襲われて
鳴り止まぬ心臓の音
思い出すあの人の顔

絶望の波に飲み込まれ
家も車もおもちゃのように
人はまるで人形のように

命のはかなさを嘆き悲しみ
夢や幻だと信じたくなりながら
目の前の光景をしっかり胸に刻み込む
決して忘れてはならないことだから

近いか遠いか、いつの日か
あの日は地球がダンスをしたんだと
懐かしさと切なさを散りばめた笑顔で
話せるときが来るはずだから

その日を信じて歩き出そう
あの日を忘れないでいよう
そうやって今日という日を生きることが
希望そのものなのだから

その日が来たらわたしは
あの日欠けてしまったグラスを取り出して
今日という日を乾杯しようと思う
未来はわたしたちを拒みはしないはずだから

悲しみをのりこえて

黒岩真美（福千葉県　四十一歳）

あの日から
ひとつの灯が消えてしまった

まだ年若い女子学生だった私の妹
3月10日まで楽しそうに「アハハ」と笑っていた
3月11日の不幸を誰が予測できただろう

私の妹だけではない
誰が自分の家族を失うなどと思っただろう

でも私は信じている
太陽が東から西に昇るように
希望はきっとある
この大震災のさなか生まれた命もあるという

みんな、心をひとつにして
手と手を取り合って
悲しみをのりこえて
明るい未来をつくっていこう

明日からの足音

堤　渓介（福東京都　二九歳）

二本の足で立てないならば
四本の足で立てば良い。

四本の足で立てないならば
六本の足で立てば良い。

きこえてくる……。
聞こえてくるだろう。

「きこえる！？」

明日からのたくさんの足音が
今まさに
「聞こえる」

灯し火

加藤正江（仙台市青葉区　五五歳）

ちょっとそこまでが
大震災の日となった
揺れる店内
叫び声
波打つ階段
つんのめる足
遂に
地球が壊れるのだと
悪魔の前にひれ伏した

鳴りっぱなしの警報音
無惨に転がる観葉植物
言葉を無くした人々が
白い土煙の中を駆け出す

家は
息子は
夫はと
見上げた空は泣いていた
耳から離れぬ警報音

春を蹴散らす雪が舞い
暗闇の中
身を寄せあった
震災の夜
畏敬の念で
灯し火を見た

小さな兎の温もりが
じんわりと
生きる希望に変わっていった

オレンジ色の光の中で
もう二度と
悪魔にひれ伏すことはない

君の空へ

雨野千晴（福香川県丸亀市　四一歳）

まっ青な空をつきぬけて
きみに願いよ届け
まっすぐな光を浴びて
ぼくたちは生きている

ありがとう
すてきだね
今日もいい日

言葉はチカラになる
きっと始まっている明日を夢見て

つかれたときは
ココロの扉をすこし開けて
さわやかな風に誘われて